

徳島県下出土のナイフ形石器・細石器

天 羽 利 夫

1 はじめに

徳島県内で旧石器資料が注目されるようになったのは、昨年あたりからである。その発端は、阿南市桑野町廿枝遺跡の発見であった。筆者等は、その時点で資料を集成し、報告しておいた。^{註(1)}

ところが、最近になって、県西部で活躍されている北川右二、佐藤忠邦、田中猪之助の三氏から新しくナイフ形石器を発見したとの報告を相ついで受けた。それらの資料のなかには、県内ではじめてのいわゆる国府型と呼ばれるナイフ形石器があったのである。前回の報告と重複する資料が多いが、これらの新資料を加えて、本紀要の発刊を機会にあらためて報告しておきたいと思う。

本稿執筆にあたって、遺物所蔵者の方々には資料の発表についてご快諾いただいたほか、とくに北川右二氏、佐藤忠邦氏、田中猪之助氏にはいろいろお世話いただいた。ここに記して感謝する次第である。

2 ナイフ形石器

(1) 三好郡三加茂町丹田出土（第2図1～2）

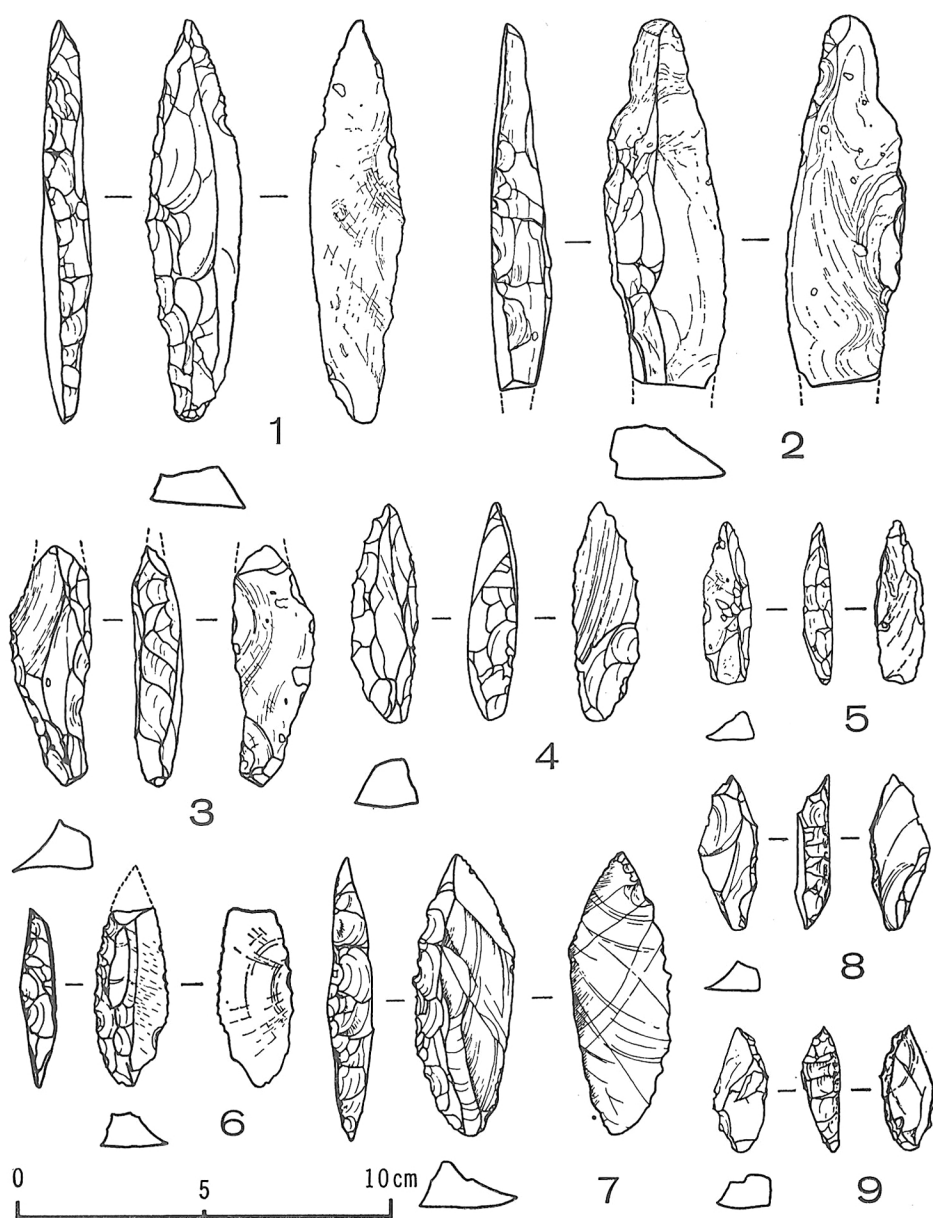
三好郡三加茂町鍛冶屋敷の加茂谷の西峰、標高約300mの丘陵先端部に県指定史跡丹田古墳がある。^{註(2)}この古墳から、稜線にそって西へ百数十mの丹田部落（わずか三軒の）に至るまでの南斜面は、かなり急傾斜ながらも開墾された畑地がひろがっている。

この南斜面から、昨年2本のナイフ形石器が発見された。①は丹田豊氏が5月に自宅裏で採集したもので、②はそれより東側の丹田古墳にほど近い、現在開墾されている一番東の畑から、北川右二氏が11月に採集したものである。遺跡は、赤土に混じって岩盤の破碎された結晶片岩が一面に散らばっている。若干のサヌカイトの破片が採集されているが、参考になる資料はまだ見当らない。

① サヌカイト製の非常にすぐれた大形のナイフ形石器である。全長10.7cm、巾2.5cm、厚さ1.2cm。先端をわずかに欠いているが、鋭く、全体に細身である。一見して横剥ぎ剥片であることがわかる。おそらく瀬戸内技法による翼状剥片を使用したものと思われる。丹念に調整し、しかも剥離痕は明瞭である。一側刃は剥片の鋭さを残して刃部とし、何の加工もしていない。一方は剥離面から二次加工をして調整している。断面は台形状を呈する。田中猪之助氏蔵。



第1図 丹田遺跡（左下）及び東上野遺跡（右上）
地形図（5万分の1、『池田』）



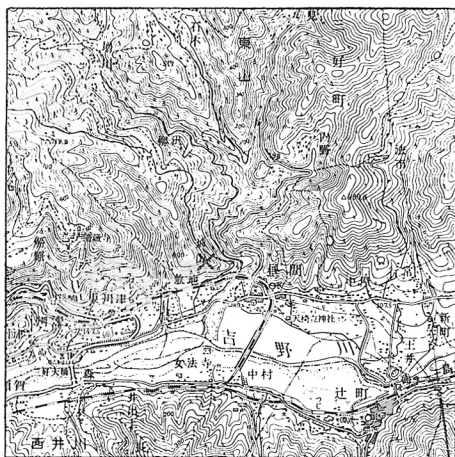
第2図 徳島県下出土のナイフ形石器

①～② 三好郡三加茂町丹田出土 ③ 三好郡三好町昼間・土取り出土 ④～⑤ 三好郡三野町勢力・東上野出土
⑥ 板野郡板野町羅漢・平山出土 ⑦～⑨ 阿南市桑野町廿枝出土

② ①に比して粗雑であるが、同じくサヌカイトを原石とする。これも翼状剥片を使用している。剥片のままの状態で、とくに鋭利にするという工夫もみられない。基部は折れている。長さ9.9cm、巾3cm、厚さ1.4cm。もともと①よりも大きかったのであろう。断面は①と同じく台形状であるが、打面側はほとんど直角に近く、先端部は三角形となる。

(2) 三好郡三好町昼間字土取出土(第2図3)

昼間には、古くから山城で知られる標高400mの城山がある。城山の頂上から東側50～60m下のところに、小川谷に面して平坦な台地がひろがっている。ここから石鏃などが出土することは、



第3図 土取遺跡地形図（5万分の1、『池田』）

(3) 三好郡三野町勢力字東上野出土（第2図4～5）

吉野川の北岸三野町は、河岸段丘の発達したところで、地元の熱心な愛好者の努力もあって、いたるところに弥生時代の遺跡が確認されている。この遺跡も、おびただしい数の石鏃などが出土することで注目されていた。④の資料については、旧稿で紹介しておいたが、そのなかでまた1点発見らしいと述べておいたのが⑤の資料である。④と同じく、佐藤忠邦氏が昭和44年4月に採集したものである。

④ 全長5.8cmの完形品で、巾1.7cm、厚さ1.3cmのサヌカイト製である。大きさに比して、厚味がある。横剥ぎの剥片を使用し、両側に剥離面から二次加工をしている。また剥離面の基部には若干の調整痕を残している。

⑤ ④よりも小形で薄い。長さ4.4cm、巾1.3cm、厚さ0.8cm。両側ところどころに新しい欠けが見られる。加工痕は明瞭である。一侧刃は剥片のまま刃部とし、打面側は剥離面から二次加工している。断面は三角形。原石はサヌカイト。

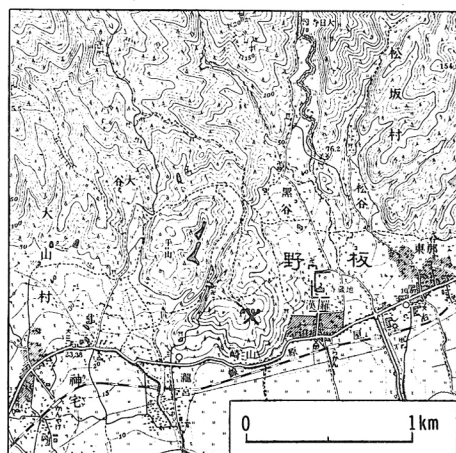
(4) 板野郡板野町羅漢字平山出土（第2図6）

四国霊場第5番札所地藏寺のすぐ西側の小高い山は、阿讃山脈から南にせり出して広がる平坦な台地で、磯尾山と呼ばれている。この資料は、地元の吉兼高市氏が果樹園造成中に採集したもので、今から6年前のことである。この台地から数多くの石器が発見されているが、この資料とは年代を異にするものばかりである。

採集地点は、台地の先端に近い、標高80.8mの三角点（この三角点は直径10mほどの円墳の上に立っている）のすぐ東側である。出土地点は果樹園にか

かなり前から知られていたようである。ここに示す資料は、昭和44年10月、北川右二氏が石鏃などといっしょに採集したものである。他の石器とは年代を異にすると思われるので、この1点の紹介のみにしておく。

③ 先端を欠くが、7～8cmはあったであろう。長さ6.4cm、巾2.2cm、厚さ1.3cm。サヌカイトの横剥ぎ剥片を使用している。平面的にはやや三角形となる切り出しの形態であろうか。両側を打調しているが、左側上部から先端にかけて剥片のままを刃部としている。



第4図 板野町羅漢・平山出土地点
（2万5千分の1、『大寺』）

わり、ブルドーザーで整地されたらしいが、周辺の畑地は期待がもてる。

⑥ サヌカイト製。白く風化しているが、加工痕は明瞭である。先端は欠けており、約6cmはあったものと思われる。長さ4.8cm、巾2.0cm、厚さ0.9cm。横剥ぎ剥片を使用している。翼状剥片に近い形態である。一侧刃は、剥離されたままの刃部をもち、わずかに刃こぼれらしい痕跡がある。一方、打撃面は剥離面からていねいに調整している。

(5) 阿南市桑野町廿枝出土（第2図7～9）

今まで紹介してきた遺跡は、いずれも県北部の吉野川流域にある。廿枝遺跡は、県南のリアス式海岸で有名な橘湾の西側、標高140m程度の低い山塊の西麓にある。前述の4例と異なり、やや低く立地し、しかも北斜面下であって、北側の水田との比高は3～4m程度である。この遺跡については旧稿で詳しく紹介しておいたので参照されたい。

この資料は、昭和42年8月、自宅の宅地を造成していた佐藤忠男氏が発見したものである。残念なことに、遺跡のほとんどは破壊されてしまったようである。この遺跡の特徴は、チャートを主体とした石器群にあり、県北で見られるサヌカイトを主体とする遺跡とは異なっている。

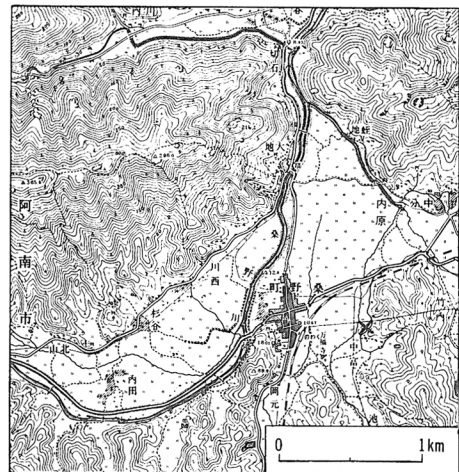
⑦ きわめて精緻につくられている。酸性凝灰岩製の完形品で、長さ7.5cm、巾2.7cm、厚さ1.2cm。一見、翼状剥片のように見えるが、横剥ぎではなく縦長剥片を使用している。一侧刃は剥離されたままの状態で鋭い刃をもち、片側は剥離面から調整し、かなり細かく二次加工している。

⑧ チャート製で、小形の切り出し形である。チャート特有の鋭さが見られる。おそらくは縦長の剥片を使用したものと思う。左上半分は剥片のまま残し、下半分と反対側に二次加工をほどこしている。長さ4.2cm、巾1.6cm、厚さ0.8cm。

⑨ ⑧とほとんど同じ形態の特徴をもつが、さらに小さい。同じくチャート製。長さ3.3cm、巾1.5cm、厚さ0.9cm。先端は鋭いが、身は厚い。横剥ぎの剥片を用いている。

考 察 筆者が、徳島県内ではじめてナイフ形石器に接したのは羅漢遺跡出土の資料で、昭和42年の秋のことであった。それ以来、この類の石器にはとくに注意していたのであるが、昭和43年12月に廿枝遺跡の確認をきっかけに、今日まで第2図に示したとおり5遺跡9点を数えるまでになった。いずれも採集品ではあるが、資料の乏しい本県の現状からして、いかに貴重な資料であるかいうまでもない。

ところで、旧稿において、廿枝遺跡のナイフ形石器を形態的特徴から二形態に分類しておいた。⑦の大形の木葉状ナイフ形石器を廿枝Ⅰとし、⑧、⑨の小形で切り出し形を廿枝Ⅱと仮称した。そして廿枝Ⅱをいわゆる井島Ⅰ型に比定し、廿枝Ⅰはそれより古く宮田山型ないしは国府型に対比しておいたのである。



第5図 廿枝遺跡地形図
(2万5千分の1、『馬場』)

瀬戸内地方におけるナイフ形石器は、いわゆる瀬戸内技法による翼状剥片を用いた国府型、つづいて翼状剥片という一定したとらえかたはできないにしても、任意の横剥ぎ剥片をもとにつくられる宮田山型、さらには細石器的な小形の切り出し形ナイフの井島Ⅰ型という展開をしている。とりわけ、^{註(7)}一貫して横剥ぎ剥片を基本とし、次第に小形化の傾向をたどっているといえる。

このようななかで、徳島県下出土のナイフ形石器は、はたして瀬戸内地方の範ちゅうで把握することができる。丹田遺跡出土の①、②は、いずれも翼状剥片からつくられた国府型とみてもよいであろう。土取り遺跡の③や東上野遺跡の④、⑤の形態は、横剥ぎ剥片を使用した宮田山型とみなすことができる。また、羅漢遺跡の⑥は、翼状剥片に近いが、同じく宮田山型とみて差し支えない。これらの石器がサヌカイトを原石としていることから、瀬戸内の様相と類似している。したがって、廿枝Ⅱがチャート製という違いはあるにしても形態的には井島Ⅰ型であり、これを加えることによって、本県におけるナイフ形石器は系統的に把握できる。

ただ、旧稿において指摘しておいたように、廿枝Ⅰのナイフ形石器については、今なお検討をまちたい。この石器が、縦長の剥片によってつくられていることは、少なからず問題を提起している。ある意味では、瀬戸内技法とサヌカイトという問題に側面から具体例を示すであろうし、また見方をかえて、いわゆる九州型ナイフ形石器における問題と同じように廿枝Ⅰを考えてみる必要もあろう。

廿枝遺跡出土の剥片をみると、^{註(8)}チャートが原石であるせいか一定した剥片はほとんど見当たらないが、わずかに第6図に示した⑭、⑮の二点には共通した特徴がある。いずれも4cmあまりの縦長剥片である。瀬戸内地方での縦長剥片は、岡山県鷲羽山遺跡において顕著であり、国府型ナイフ形石器より古い鷲羽山Ⅰの文化のなかでとらえられている。^{註(9)}筆者は、廿枝遺跡の場合、むしろ廿枝Ⅱのナイフ形石器と関連して考えている。しかし、今のところ解決の糸口は何も見い出していない。

3 細 石 刃

(1) 阿南市桑野町廿枝出土(第6図10~13)

前述のナイフ型石器と同時に佐藤忠男氏が採集したものである。

⑩ 乳白色の酸性凝灰岩を使用している。全長2.4cm、巾1.0cm、厚さ0.3cm。中央に1本稜線を持ち、両側辺は鋭く、わずかに刃こぼれ様の痕跡を残す。断面は三角形を呈する。

⑪ チャート製で、下部は欠損したようである。長さに対して巾広い。全長1.95cm、巾1.2cm、厚さ0.4cm。形態は⑩とほとんど同じ。両側辺に刃こぼれ様の痕跡が見られる。断面は同じく三角形。

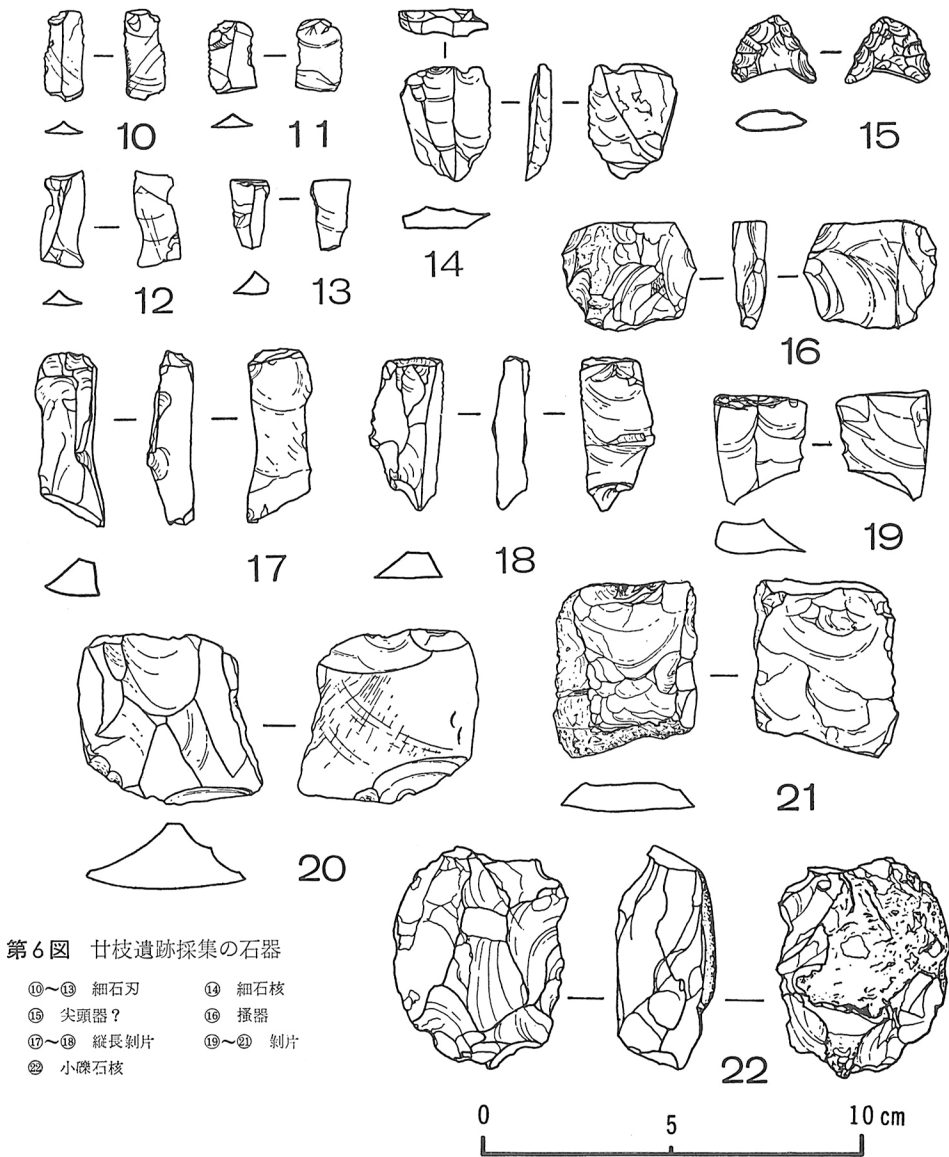
⑫ 一応細石刃としておいた。両側辺が中央の稜線に対し、わん曲しているが、いずれも鋭い。断面三角形。チャート使用。全長2.6cm、巾1.1cm、厚さ0.4cm。

⑬ これも一応細石刃としておいた。左側辺にわずかに刃こぼれ様の剥離を残す。長さ1.8cm、巾1.0cm、厚さ0.6cm。厚味がある。チャート製。

考 察 筆者の知るかぎり、県内で細石刃の出土はこの例だけである。旧稿で、これらを廿枝Ⅲとして把握し、瀬戸内での細石刃文化、井島Ⅱ^{註(10)}に対比して考えてみた。

⑭は細石核の一部ではないかと考えられる。チャート製で、2本の稜線を持ち、連続的に剥離されている。反対側は、結晶部分で剥離している。しかし、細石核としてもどのような形態の細石核で

あったか不明である。



4 お わ り に

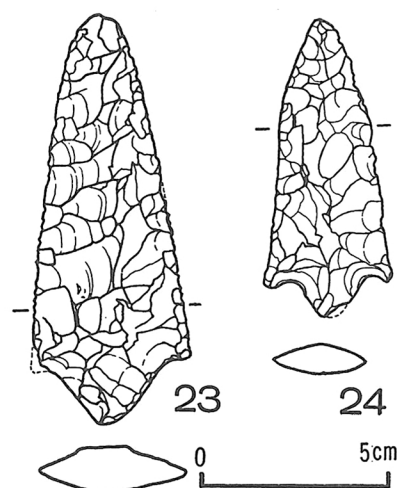
以上、徳島県内出土のナイフ形石器、細石器について紹介してきた。これらを集成し検討してみると、今後の研究課題をいくつか示唆している。

その一つは、徳島県内において、サヌカイトを主体とする遺跡とチャートを主体とする遺跡の二つの姿が存在するのではないかと想起されることである。先に示した資料でみるかぎり、サヌカイトを主体とする遺跡は県北部の吉野川流域のようである。これに対して、チャートを主体とする遺跡は

いうまでもなく廿枝遺跡のように、チャートの産出地に近い県南部の山間部であろう。県内のチャート産出地は、剣山から東に縦走し中津峰を経て、小松島に至るいわゆる秩父層群に属する一帯である。那賀川上流にある古屋岩陰遺跡からは、押型文土器に伴ってチャート製石鏃3点が出土しており、県南山間部は有望である。廿枝遺跡がほとんど破壊された現在、もはやこの遺跡から多くを望めない。^{註(11)} 類似遺跡の発見がまたれるところである。

これに関連して注意しなければいけない問題は、サヌカイトの石器群とチャートの石器群のあり方であろう。今のところ丹田遺跡、土取遺跡、東上野遺跡、羅漢遺跡などいずれもナイフ形石器単独の出土であり、各遺跡の実体を知るまでには至っていない。幸いなことに、廿枝遺跡においてはナイフ形石器をはじめ、細石器、尖頭器、搔器、小礫石核、縦長剥片、石鏃など多くの種類が発見されている（第6図参照）。ただ、これらがどのような組合せにあったか明らかでないが、遺跡の様相を知ることのできる唯一の資料である。

また編年的には、丹田遺跡出土の国府型ナイフ形石器が一番古く位置づけられるが、それ以前の石器の発見も期待されてよい。新しくは細石器文化に続く有舌尖頭器は、県内で鳴



第7図 有舌尖頭器2例

1：鳴門市大麻町大谷出土
2：海部郡由岐町木岐出土



第8図 遺跡分布図

1 三好郡三加茂町丹田 2 三好郡三好町昼間 3 三好郡三野町勢力字東上野 4 板野郡板野町羅漢字平山
5 阿南市桑野町廿枝 6 鳴門市大麻町大谷 7 海部郡由岐町木岐 8 那賀郡上那賀町古屋字堂見谷

門市大麻町大谷，海部郡由岐町木岐の2例^{註(12)}があり，これらは断片的ながらも，編年の穴を一つ一つ埋めていくように思う。

徳島県においては，旧石器文化の研究はもとより，縄文文化の研究などまだ未開拓の分野が多い。今後これらの研究の進展に期待するところは大きい。先学諸氏のご批判とご指導を賜りたいと思う。

- 註(1) 天羽利夫，立花博「徳島県甘枝遺跡採集の石器—徳島県出土のナイフ形石器—」（『古代学』第16巻1号所収，京都，昭和44年）
- (2) 三加茂町教育委員会他『丹田古墳調査説明会のしおり』（徳島，昭和44年）
同書によれば，この古墳は，4世紀代の全長37mの積石の前方後方墳である。昭和44年3月，発掘調査によって銅鏡，鉄剣，鉄斧など出土している。
- (3) 三好町誌編集委員会編『三好町誌』（徳島，昭和34年）
徳島県教育委員会『徳島県遺跡目録』（『徳島県文化財調査報告書』第7集所収，徳島，昭和38年）
同書には県番号538として報告されている。
- (4) 前掲書『徳島県遺跡目録』所収
同書の県番号357がこの遺跡である。
- (5) 註(1)に同じ
- (6) 鎌木義昌「香川県井島遺跡—瀬戸内における細石器文化—」（『石器時代』第4号所収，東京，昭和32年）
- (7) 鎌木義昌・高橋護「瀬戸内地方の先土器時代」（『日本の考古学』第1巻所収，東京，昭和40年）
- (8) 鎌木義昌・間壁忠彦「九州地方の先土器時代」（前掲書『日本の考古学』第1巻所収）
同書は「国府型ナイフ型石器の技法が特異なものであっただけに，縦長剥片による九州型ナイフ型石器の出現は瀬戸内地方でのナイフ型石器の推移とは別の文化的影響によるものか，あるいは使用した石材の性質によって自然におこりうるものか問題は多い」と指摘している。
- (9) 鎌木義昌「岡山県鷲羽山遺跡調査略報」（『石器時代』第3号所収，東京，昭和31年）
- (10) 註(6)に同じ
- (11) 立花博「古屋岩陰遺跡発掘調査の報告（1～2）」（『徳島県博物館報』第5～6号所収，徳島，昭和42～3年）
- (12) 註(1)に同じ